

# デジタル時代の韓国における映像視聴行動と動機

## —若者の映像メディア利用行動研究から「利用と満足研究」

### アプローチの再考を通して—

たけむら ともこ  
竹村 朋子

世界の先進各国では、デジタル・メディア映像視聴の機会が多様化している。その中でも、近年、韓国におけるデジタル・メディアにかかわる普及拡大の速度は著しい。そこで、本論文では、映像視聴環境の変化を背景に、デジタル時代の韓国における若者の映像視聴行動について理解することを目指した。韓国における映像視聴行動を捉えなおし、これまでの「利用と満足研究」のアプローチを再考することで、新たな理論を提示し、理論的な貢献をすることを目的としている。

映像視聴のデジタル化は、新たな映像視聴手段を生み出し、映像視聴形態を多様化させただけでなく、従来の映像視聴方法であるテレビ機器を通じたテレビ番組視聴にも影響を及ぼしつつある。その結果、今日の韓国では、テレビ機器の必要性が低下しているが、映像視聴行動において、「ダウンロードによる番組視聴行動」と「テレビ機器による番組視聴行動」の併存関係が維持されている。そこで、既存メディアの「テレビ機器」を通じた視聴行動と、デジタル時代の新たな映像視聴手段である「テレビ番組映像ファイルのダウンロード」を通じた視聴行動とを比較することで、「ダウンロード視聴」によるテレビ機器の代替可能性について明らかにすることを目指した。

「利用と満足研究」では、先行研究で提示された充足を、新規メディアに単に当てはめて量的調査を実施する分析手法が多いものの、本論文ではその方法の問題点を指摘し、より妥当性が高いと思われる質的調査を実施した。インタビュー調査の結果から、「ダウンロード視聴」に関して、「ファイルの保有性」「時間からの解放」「場所からの解放」「映像の多様性」「選択的視聴」、そして「テレビ機器の非所有」という既存メディアの先行研究とは異なる利用動機が示された。「テレビ機器視聴」は、「共同視聴」「リアルタイム視聴」、そして「画面の特性」などテレビ機器の独自特性に関連した動機によって行われている傾向がみられた。映像視聴動機に影響をもたらす要因としては、「映像視聴手段の多様化」「映像コンテンツの多様化」「個人用テレビ機器の非所有」「地上波放送以外の放送コンテンツの人気」、そして「日常生活の忙しさ」が確認された。